

北海道タイムス

発行所 札幌市大正通四丁目1番地
電話 0131-0133
北海道通信社
北海道タイムス社 1968

北海道タイムス社編

赤で決まった
新しい画像!



青対部長に石原氏
自民党は日本の役員会、全国組織委員会青年対策委員、石原氏、大野氏(院全国)同時、青部長に大谷博文氏(同)、また、新設の都道府県連に中山太郎氏(同大)を添えて、とを認められた。

和田 札幌

心臓移植

植に成功

執刀

少年に

和田グループ

記録

た。手術例は日本で初、世界で三十番目である。患者は恵庭町相生の宮崎武雄さんの三男信夫君(七)で、心臓提供者は七日夜、病院に運ばれた二十歳の青年(家族の希望で名を秘す)。手術は和田壽郎教授の執刀と胸部外科グループによって三時間にわたって行なわれたが、八日午後三時現在、信夫君は血圧、脈はく、体温

学界に大きな貢献
和田二進医師会長の語。これまで日本の外科医学は欧米に比べて遅れているという見方があったが、心臓移植成功という事実をもつ世界的な水準を示したことは顕著であり、莫大の進歩を遂げた。心臓外科科長、十歳年を過ぎた信夫君が世界的手術に成功したのは医学界にたいしての大きな貢献といえる。

提供は二十歳

順調

和田壽郎教授の話。日本初の手術なので外国の手術例などを十分研究、そのノウハウを考へ

和田教授はこの手術は約一週間が、患者に意識がなく順調に経過すれば成功したといえる。患者には先月下旬から心臓移植のほかに治療の方向がないといっていたが、患者が死んでも構わない、とほしかったといっていたと述べている。
また同教授は「よくに手術の自

北海タイムス社編

心臓移植

和田グループの
記録

誠文堂新光社

心臓移植 和田グループの記録

昭和43年10月10日発行

定価 320 円

◎ 編者 北海タイムス社

発行者 小川 誠一郎

発行所 誠文堂新光社

東京都千代田区神田錦町1～5
TEL (292) 1211 振替東京6294

検印省略

郵便番号101

印刷／大日本印刷 製本／藤沢製本所

Printed in Japan

……………誠文堂新光社発行の雑誌……………

子供の科学・無線と実験・初歩のラジオ・商店界
電子展望・天文ガイド・農耕と園芸・ガーデンライフ・囲碁
アイデア・ブレン・シーズンディスプレイ・愛犬の友

子供の科学 毎月9日発売

北海道知事序文

明治百年、北海道百年という記念すべき昭和四十三年の八月八日早朝、わが国で初めての心臓移植手術が行なわれました。これは、世界でちょうど三十番目に当たる壮挙であり、札幌医科大学で、北海道出身の和田寿郎教授によって行なわれたものであります。が北海道の開拓者精神を、医の実践によって示したものといえます。

和田教授は、国内では初めての胸部心臓血管外科学教室の創設者であり、この分野における研究業績は、本邦の医学界はもちろん、国外においても極めて高く評価されております。また、同教授が発明された心臓の人工弁（和田弁）が世界各国の多くの心臓弁膜症患者に福音をもたらしていると聞いております。

今回新しい医学の分野に対して敢然としていどみ、それも病める者への奉仕という崇高な理念に基づいて、この偉業を成し遂げ、宿命の少年宮崎信夫君の生命をよみがえらせた人間愛に深く敬意を表します。ここに同少年の回復の一日も早からんことを祈念し、和田教授とそのグ

ループの功績を、人類に対する偉大な功績として讃えたいと思います。

昭和四十三年九月十五日

北海道知事 町村金五

和田グループの一言

● 胸部外科

和田寿郎教授(^四) 一方に回復不能の心臓疾患患者、他方に死んだ人間がいた場合、二つの肉体を結んで一つの生命を救おうとするのが医師の正しい道であると信ずる。

三時間余の手術を終わって外を見るとすっかり夜が明けていた。あんなすがすがしい朝を迎えたことはかつてなかった。医師としての良心に従って全力を尽くした満足感であった。電気ショックもかけずに新しい心臓が自ら動き出した一瞬を私は永久に忘れられないだろう。

富田房芳講師(^三) 難治性心疾患を救う一つの明るい希望をもたらせる心臓置換術に参加できた喜びを強く感ずるとともに今後この命題に一層のファイトをもって臨床に、研究に打ち込みたい。

池田晃治助手(^三) 手術室は東向きに窓があるため、当然、夜明けの光に気付くはずであったが、だれかがそれを指摘するまで、みんな手術台上で進行しつつある事実を注視していた。

心臓置換は完べきな手順で最後の皮膚縫合を完了、初めて自分の目にも夜明けの実感が飛びこんできた。八月八日の朝、それは日本における一つの新しい心臓外科の夜明けでもあった。

渋谷雄也助手^(三六)

日本の胸部外科史上、モニュメンタルな手術に、和田先生にお教へを頂いたお蔭で参加できたことを光榮に思っています。この事を胸に、着実に前進したいと思います。

金子正光助手^(三七)

和田教授をはじめとする教室員一同の心臓外科に対する絶え間ない努力と見事なチームワークが今回の成功をもたらした大きな要因であろう。医学史上に残るこの壮挙にメンバーの一員として参加し得たことを最大の誇りとします。

門脇裕研究生^(三八)

今回の心臓移植術の成功は、わが胸部外科にとっても最高の喜びである。少なくとも心臓移植術は、ここ数年来、心臓外科医にとって禁断の木の実であったことに間違いはない。しかしこれはイブがリンゴをたべ、パンドラが箱を好奇心から開けた様なものと違い、またこのこと自体が宇治川の先陣争いとも異種のものである。この手術には生命に対する畏敬の念があると信ずる。一カ月を経過した今日、信夫君の早期社会復帰を願うとともに、本邦初の心臓移植術に立ちあうことのできた幸運をかみしめている。

田中信行研究生^(三九)

メンバーであることの誇りと自信を感じます。手術が終わった瞬間、

和田先生から握手を求められて感激でいっぱい。涙があふれて仕方がなかった。

安倍十三夫 研究生(三〇) 日本で最初の心臓移植に成功したのも和田教授を初めとするチームワークと、人工弁移植術を含めて心臓手術の豊富な経験によるものと確信し、今後も前向きに努力して行かねばならぬと考えております。

長尾恒 研究生(三一) この歴史的な場合に自分がいあわせたこと、また自分なりに責任の一端を果たすことができたことを誇りにおもう。

田口善作 研究生(三二) 人工心肺停止直後の血圧が「一三〇だ」と麻酔科の小川助教教授がいったのを聞いたとき、信じられず耳を疑ったが、術野をのぞき込んでみた心臓の力強い拍動と心電図の示すR波をみて、なんともいわれぬ満足感が次第にこみあげてきて、胸が一杯だった。昨夜からの疲れも全然感じられなかった。

山田弘 研究生(三三) 手術が終わって、こんなに世間から騒がれるとは思っていなかった。すでにたくさんの手術を手がけていたので、失敗することはまずないと確信していた。

湯川元資 研究生(三四) なさなければならぬことを、完遂する。その充実感と、「自分自身もこの世に生きている」ことを確認した喜びであろう。

安達博昭研究生(二六) われわれにとって、心臓手術は毎日の仕事とはいえ、いざ日本最初、そして世界で三十番目の手術が始まると決った時は、かすかな緊張が体中に走った。それも一瞬にしてあわただしく手術が始まった。何時間が過ぎたか見当もつかない。最後の縫合が終わりに植えつけられた心臓が力強く規則正しいリズムを打ち初めた瞬間、四十の瞳は無言のまま、うれしさに輝いた。ふと窓を見上げるといつから降り始めたのか、雨は止み、東の空は八月八日の朝日に輝いていた。

まさに新しい生命の輝きであった。

数井暉久研究生(二七) 日本で最初の心臓移植手術が行なわれた年に胸部外科に入局し、しかも医師団の一人として仕事を与えられたことは、私にとって非常に幸運だと思う。

上戸敏夫研究生(二八) ベストを尽くした。和田教授らの指示のとおり動いた。みんなが一身同体となつて働いた。チームワークということはこのことだと思つた。

狩野一臣研究生(二九) 心臓の外科手術が我が国で行なわれ始めて十数年という日の浅いこの学問において、今や、四十例以上にも及ぼんとする全く最先端の心臓移植術を、日本では札幌医大がその端を切つたということは、医師としてスタートして間もない私には驚きと喜びで一

杯である。さらに他の分野の学問の進歩とともに、医学の分野においても、医学の教科書から一つ一つ、「不治」「難治」という文字を消して行く仕事は、今回の移植手術の成功により我々に与えられた重要な課題であることを強く肝に銘ずることができた。

近沢良研究生^(三七) 移植された心臓が拍動を始めた。その瞬間、ただ感涙ひとしおであった。

藤堂景茂研究生^(三八) 縁起をかつぐわけではありませんが、六八年の八月八日末広がりの8の数が3つならんだこの日に新しい医学の一步がしるされ、これに参加できた。幸運だったと思います。

馬原文彦研究生^(三九) 今回の手術に少しでもお役に立てたことを非常な光榮に思います。手術が終わって和田先生に握手をしていただいたときには感激でいっぱいでした。これからも医学の前進のためにがんばります。

● 麻酔科

小川秀道助教^(四〇) 私のにぎっている麻酔器のバッグの中にじかに触れてくる手術前の宮崎君の呼吸は余りにも少なく、また余りにもたよりなかった。そして心臓の脈動は血圧を聴取す

る私の両耳に全く不規則に、か弱く伝わってくるだけだった。

興味と懸命の錯綜した注視の中で移植された新しい心臓は、何はばかりことなく全くリズムカルに力強い鼓動を開始していた。感動の一瞬だった。

まえがき

『ナニツ、心臓を入れ替えた……』社会部のデスクが電話で、でっかい声をはり上げた。それと同時に、私は思わず局長席から立ち上がってしまった。聞けば間違いなく心臓移植の成功である。時に昭和四十三年八月八日午後二時五十分。

久保田社会部長には『キミツ、手術の成功はよいが、死の認定の問題を忘れてはならんヨ』と取材上の注意、すぐさま、全社に夕刊締め切りの延長を指令、協力を求めた。

この日から連日、大幅に紙面をさいて報道に当たったものである。読者の方からは幸い『心臓移植の記事は、タイムスさんが一番系統的で読みやすかった』というおほめのことばをいただいた。これに勇気づけられたわけではないが、北海道で起きた世界的なニュースを収録しなおすことは、日ごろお世話になっている北海道の方々に対するお礼でもあり、義務とも思い出版に踏み切った。実際に今回の事件は、純粋な医学界のできごとというより、始めから巧みに演出された“生と死と愛”の人間ドラマといった感じで、これを一卷に収めたいという強烈な

衝動にかられたことも事実である。

早速東京に飛び、盟友である小川誠一郎誠文堂新光社社長に話したところ、即座にご快諾を得、早期に出版されることになったことは幸いである。ここに同社長に感謝するとともに、序文をお寄せいただいた園田厚生大臣と町村北海道知事に対してお礼を申し上げたい。また本書の作製に当って、ご多忙中何かとご高配を賜わった和田寿郎先生に心から感謝し、大方のご愛読をお願いする次第である。

昭和四十三年八月三十一日 天皇ご来道の日

北海タイムス社 専務取締役編集局長 仁藤正俊

目次

心臓移植―和田グループの記録―目次

厚生大臣序文

北海道知事序文

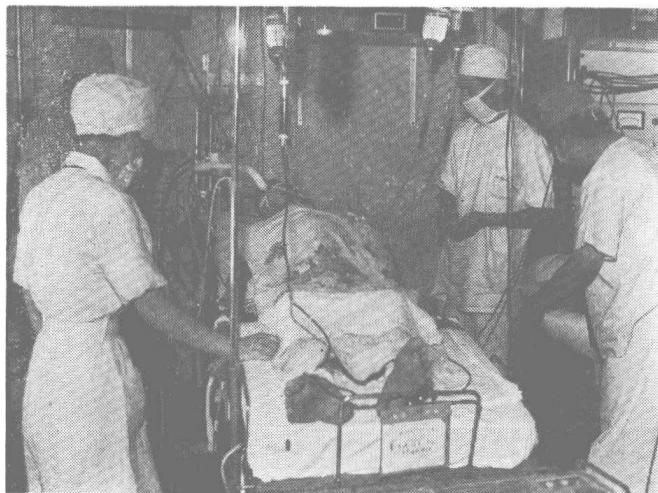
和田グループの一言

まえがき

| | |
|-----------------------|----|
| 1. 歴史の三時間…………… | 1 |
| 2. 第一報…………… | 14 |
| 3. 私はかく手術した 和田寿郎…………… | 21 |
| 4. 信夫君と家族の苦悩…………… | 37 |
| 5. 乗り越えた七十二時間…………… | 51 |
| 6. 提供者名乗り出る…………… | 77 |
| 7. 人間“和田”…………… | 91 |

| | |
|-----------------------|-----|
| 8. 順調な経過 | 103 |
| 9. 和田グループと札幌医大 | 139 |
| 10. 死の認定 | 151 |
| 11. 渡辺淳一氏の手記 | 162 |
| 12. 拒絶反応と自分の中の他人 | 170 |
| 13. 心臓提供者続々 | 183 |
| 14. 和田教授の心境 | 187 |
| 15. 寄せられた善意 | 196 |
| 16. 報道陣の世話買って出た元総婦長さん | 200 |
| 心臓移植とは | |
| 1. 心臓・その仕組み | 204 |
| 2. 人工心臓 | 214 |
| 3. ダブルハート(心臓ドッキング) | 220 |
| 4. 人工弁 | 224 |
| 5. 高圧酸素室 | 229 |
| あとがき | |

1 歴史の三時間



日本初めの心臓移植 濃厚治療室で医師看護婦に見守られる宮崎信夫君・(8月8日)

1 歴史の三時間

夜は深い。もう午前一時はとうに過ぎたろう。

この時間になると、ベッドのきしみと、力のないしわぶきが多くなる。「重い心臓」が患者の眠りをさまたげるのだ。だれかがまた寝返りをうった。

札幌医大胸部外科病とう。病室のルームナンバーは2。

と、せわしいスリッパの音。病室の前でハタと止まった。そつとドアが開く。真っ白い手術着の若い医師が薄暗闇の中でポツ